神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 3 号

後 谷 原 北 横 穴 群

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 3

ATOYAHARA

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Naka-ku Yokohama, Japan
1 9 6 9

訂　　正

	誤	正
P1　8行	こどなど	ことなど
P1　16行	中川良元	中川良之
P1　25行	森垣洋子	森垣敬子
P8　2行	M3号横穴	M4号横穴
P8　3行	帯金具破片	M3号横穴から帯金具破片
P8　17行	直形	直径
図版33	B＝穴	B＝裏

目　　次

後谷原横穴群の調査について……1
1.　位　　置……2
2.　横穴群の概要……2
3.　調　　査……3
（1）U 1 号横穴……3
（2）M 1 号横穴……4
（3）M 2 号横穴……5
（4）M 3 号横穴……6
（5）M 4 号横穴……6
4.　遺　　物……8
5.　結　　び……9

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図……2
第 2 図　M1号横穴実測図／M2号横穴実測図……10
第 3 図　M3号横穴実測図／M4号横穴実測図……11
第 4 図　U1号横穴実測図／遺物実測図……12

図版目次

図版 1　(1) U 1 号横穴
(2) M 1 号横穴
図版 2　(1) M 4 号横穴
(2) M4号横穴前庭部羨門付近
(3) M4号横穴前庭部切込部分
図版 3　(1) M3号横穴出土　帯金具破片
(2) M4号横穴出土　須恵器長頸瓶
(3) U1号横穴出土　須恵器坏

後谷原横穴群の調査について

昭和43年度における地域研究の一部として，大磯町後谷原横穴群の発掘調査を実施したので，ここにその概要を報告する。

本調査は末期横穴墳墓における埋葬状態ならびに羨門部から前庭部にかけての構造を明らかにすることを目的として企画したものである。

後谷原横穴群を対象にした理由は，本横穴群が存在する大磯は県下において横穴墳墓が最も集中的に分布している地域の一つであり，同町内の横穴群には既に調査が行なわれたものが多く，比較研究に適していることなどである。

今回の調査した横穴は5基である。内部が既に攪乱されていたため，埋葬状態に関する資料は得られず，副葬品の種類ならびに配置等も明らかでないが，羨門部から前庭部付近にかけての構造については，以下の各項に述べるように，かなり具体的な形で捉えることができ，注意すべき所見があった。

調査期間中，降雨が多かったため，地形測量を終了できなかったが，これについては，改めて測量を行ない，記録を完成することとした。

稿を起すに当り，発掘を快諾された地主、上郎敏行，種々御配慮を賜わった高山　，大磯町教育委員会中川良元，鈴木昇，坂田吉徳氏，及び立正大学・明治大学考古学研究室ならびに発掘作業に協力された学生諸君に厚く感謝の意を表わしたい。

調査主催者・神奈川県立博物館館長　村田良策
発掘担当者・神奈川県立博物館学芸員　神沢勇一
調査参加者・川口徳治朗，岡本規子，今井厚子・〔撮影〕中野万年，
宇田川久江（神奈川県立博物館）
鈴木　昇，坂田吉徳（大磯町教育委員会）
松尾宜方，大山晃平，小野正敏，大塚真弘，内田俊秀
村山　昇，磯部久生，河原政司，矢島国雄，長崎元広
森垣洋子（明治大学）
中谷　均，柳川清彦，剣持輝久（立正大学）
調査期日・昭和43年12月16日～23日

報告執筆者・神沢勇一

1. 位　　置

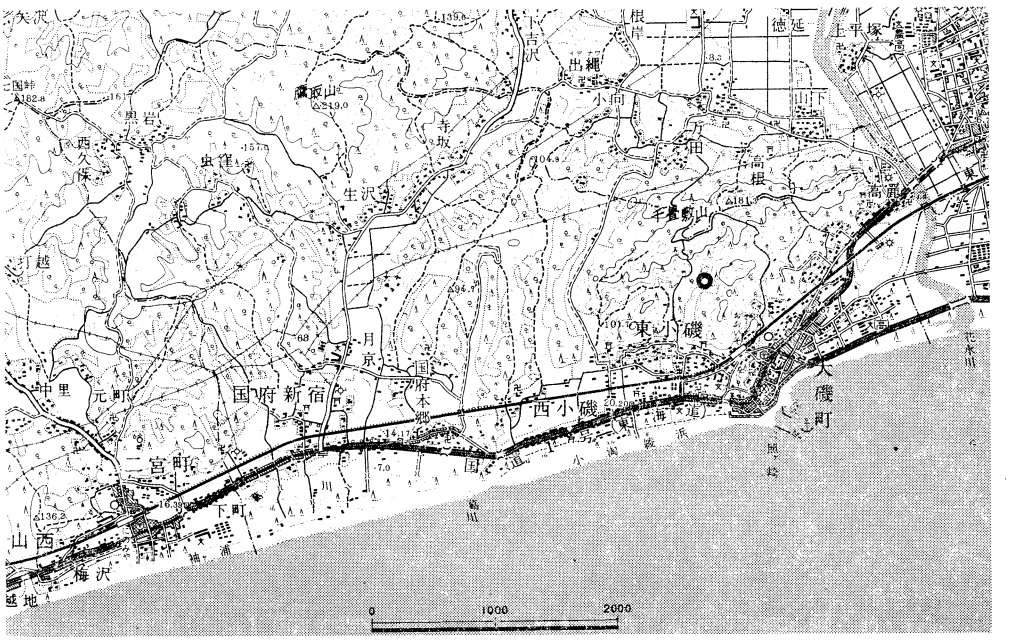
後谷原北横穴群は大磯町後谷原254番地に存在する。

相模湾北岸のやや西に寄った部分には，酒勾川と花水川にはさまれた丘陵地帯（余綾（よろぎ）丘陵）があり，その南端は海岸間近に迫っている。大磯町は，山裾と海岸線の間にある狭い帯状の平坦部の東端付近を中心に発達しており，区域は丘陵南斜面の約3分の2を占める。町の中心部の背後には，標高181 m の千畳敷山と高麗山が連なり，これらから分岐した幾つかの尾根がそれぞれ小さな谷を抱えて複雑な地形を示している。本横穴群はそのような尾根の一つの山腹に営まれたものである。横穴群の面する谷は，千畳敷山，高麗山および王城山等にかこまれた大きな谷（西南方に開口する）の最奥の支谷で，南に開口し，幅約50 m，奥行約150 m の規模をもつ。横穴群は谷奥の東側山腹にあり，東海道本線大磯駅の北北東約1 km地点に位置している（第1図）。付近の標高は約50 m である。

なお本横穴群の周辺には，後谷原南横穴群（6穴），火葬場西横穴群（8穴），前谷原横穴群（20穴）等が存在する。（注1）

2. 横穴群の概要

本横穴群は谷の東側山腹にあり，中程から裾にかけて，3段になって存在する。



第1図　後谷原北横穴群位置図

かつて，赤星直忠博士ならびに大磯町教育委員会によって行なわれた横穴分布調査の結果では，退化した家形横穴と蒲鉾形天井をもつ横穴を含む12穴が，上段に2穴，中段に7穴，下段に3穴と小群をなしており，なお多数埋没するらしいと言うことであるが，今回の調査においては上段1穴，中段5穴，下段3穴，合計9穴が確認できたにすぎなかった。中段および上段では，土の崩れ落ちが著るしく，各横穴は羨門の上端をわずかに残すのみで埋没に近い状態であったから，残り3穴は全く埋没し去ったものと考えられる。

そこで発掘調査を行なうにあたり，上，中，下3段の横穴を各段ごとに群として区分し，U，M，Lの名称を与え，各群ごとに，現在確認できるものについて右側から順に番号を付し，群の記号と番号を組合わせて各横穴の名称とした。発掘対象は，調査目的に従って，原則として同一群中から保存状態の良いものを中心に選定し，上段1基（U1号），中段4基（M1～4号），合計5基を発掘した。

これらの横穴が存在する部分には，発掘前の状態において，前面に幅2～3㎜の狭い平坦面があり，羨門周辺は高さ3㎜前後の崖になっていて，横穴の密接する中段の場合には長さ約15㎜にわたって連続していた。この平坦面と崖面は，横穴の造営方法と関係するもので，各横穴は，個別的に多少の差はあるが，山腹の一部を高さ約3㎜，幅約2.5㎜，奥行約2.5㎜程度に削って崖状の斜面を造り出し，この面から掘り込んで羨道と玄室を設け，前方に生ずる棚状の平坦面を前庭としている。崖面には中程から少し下がった付近に鈍い稜がある。この稜は前庭部を設けるさい，斜面下半部を更に急角度で削るために生じたもので，稜以下の斜面傾斜は非常につよい。調査した5基では，傾斜は稜以上では60°前後，以下では70°前後となっており，相互の間に大差は認められなかった。前庭部の規模は，M2・3・4号では末端が崩壊しており，M1号，U1号では足場の確保と断層による亀裂が多く落盤の危険があったので，末端の状態を完全に把握できなかったが，いずれにせよ，長さ2～3㎜程度の小さなものであることは，山腹の傾斜と各段の関係などからみて，誤りない

3. 各横穴の調査

（1） U1号横穴（第4図，図版1－1）

玄室と羨道の区別がなくなくなった形式で，ほとんど真西に開口する。

平面は三角形にちかく，大体左右対称形をなし，天井はいわゆるアーチ形である。各部分の規模は，羨門幅68㎝，同高さ1.3㎜。奥行2.7㎜。玄室の最大幅2.78㎜，同高さ1.4㎜で，いずれも奥壁から55㎝の点にある。

羨門は逆U字形で，崖面に斜めに開口し，崖面の下部を削って前庭を設けるため，床面から50㎝付近までは傾斜が強く，傾斜の変わる部分に稜がみられる。羨道と玄室の区別は失われているが，羨門付近では幅，高さともに小さく，約1㎡入ったあたりで壁面と天井のカーブが変化し，羨道のなごりを止める。

奥壁は蒲鉾形で，上半部が次第に前方に傾き，頂部は最大高，最大幅のある点にくる。

内部は床面をのぞき，入念に整形を行なっている。床面は凹凸が多く，特に整形した形跡はない。なお，左壁に沿って，長さ1.8㎡，幅15㎝前後，深さ7㎝前後の溝を羨門から玄室のなかばにかけて設けている。

前庭については全形を表わすことができなかったが，崖面の下端を主軸とほぼ直角に切込んでおり，右側では羨門右端から70㎝の位置に明瞭な角が認められたので，方形の平面をもつものと考えてよいであろう。羨門と前庭の境界に段，溝，その他区劃の設備はない。ただし，前庭部では床面の傾斜がやや増加する。

なお，羨門左側崖面と前庭の一部に，羨門の封鎖に使用した大小14個の岩塊が存在した。散乱の状態から，本横穴が過去に掘られたことは明らかであるが，崖面に接した7個は原状を保っているものと認められた。

遺物は玄室中央から坏（須恵器）1個が二つに割れた状態で出土したが，原位置か否か明らかでない（第5図－5，図版3－3）。

（2） M1号横穴（第2図－M1，図版1－2）

玄室と羨道の区別がなくなった形式で，形状はU1号と酷似する。前庭は形が整い，きわめて明瞭である。

玄室および羨道部分を含む主体部の平面は三角形にちかい形状であるが，玄室右側が張り出している。各部分の規模は，羨門幅80㎝，同高さ1.27㎡。奥行2.55㎡。玄室の最大幅2.47㎡，同高さ1.28㎡で，いずれも奥壁から25㎝の点にある。

羨門の形は大体逆U字形を呈し，崖面に斜めに開口する。上部の弧状部分の両端がわずかに角張り，また断面図に示すように上端が多少下に突出している。羨門部の床面上85㎝付近に前庭を掘込むさいに生じた稜があるが，本横穴では前庭が低くなっており，羨門との間に高さ15㎝の段をもつので，切込みの高さは1㎡を越え，今回発掘した諸例のうちで規模が最も大きい。羨道と玄室の区別は失われているが，右壁および天井部分のカーブの変化に，その名ごりを残す。

奥壁は蒲鉾形で，上半部では前方への傾斜が増加し，頂部が最大高および最大幅のある点にくる。なお，本横穴では天井の傾斜がゆるやかで，床面の傾斜と大体等しく，羨門付近と玄室内の高さの差が少ない。

壁面はかなり整形を加えている。床面は凹凸が多く，一部に低い段の存在を疑わせる部分があったが確認できない。

前庭は一段低くなっており，幅2.7m で大体方形を呈し，羨門床面との間には，前に述べたように段がある。先端が崩壊し，現存部の長さ1.5m であるが，下段の横穴群の崖面との関係からみて，せいぜい2.5m 程度のものであったらしい。前庭先端は幾分開きぎみの傾向がある。M2号横穴との間に残った残壁状の部分は崖面から約50cm 付近で急傾斜し，それより先は15cm 内外の高さになっている。この部分の上端は前庭を設けるさいの切込みによって生じた稜の高さよりも，やや高い。

（3） M2号横穴（第2図－M2）

羨門の左側上半部が崩壊し，前庭も先端を失なっている。

形態はM1号と基本的には異ならないが，玄室の左側がかなり張出し，高さに比の割に幅が広い。開口方向は西向きで，幾分南に振れている。

各部の規模は羨門幅80cm，奥行2.7m，玄室の最大幅2.7m，同高さ1.4mである。本横穴では奥壁と天井との境界があまり明瞭でなく，玄室部分の断面形はM1号と異なり，ドーム形に近い感をもつ。羨門右側には，前庭部を設けたさいに生じた稜があるが，明瞭さを欠いている。壁面の仕上げはやや粗く，床面は凹凸が多い。羨門部中央に幅10cm，長さ45cm，深さ10cm の小さな溝がある以外，特別な内部設備はなかった。床面の傾斜はゆるやかであるが，羨道に相当する部分では傾斜が増す。

前庭は一段低くなっており，羨門部床面との間に高さ15cm 前後の段がある。本横穴では前庭部が羨門の幅だけ，約30cm前後，くいこんだような形を示し，また羨門中央の部分では，段の下端から45cm の位置に，さらに10cm 前後の低い段がある。この段付近からは（羨道へのくいこみ部分を除き）平面形がほぼ方形を呈し，幅は1.5m 前後である。しかし，本横穴の場合は，M3号横穴と同様に，前庭部を横断する大小の亀裂があり，羨門から約1.5m 付近から先の形は把え難い状態であった。前庭の両側に不規則的な形状で，残壁状の部分が存在する。右側では崖面から約55cm，左側では70cm あたりから高さを減じている。

遺物は全く出土しなかった。

（4） M3号横穴（第3図－M3）

羨門上半部が崩壊し，前庭も羨門から約1.6 m付近で失なわれている。本横穴も羨道と玄室の区別が不明瞭になった形式で，前庭の形はM2号のそれに類似する。開口方向はM2号とほとんど同じである。

玄室は全体に不整で，仕上げも粗い。平面形では特に著るしく，玄室右側が張出し，奥壁および羨門は主軸に対して相当傾いている。各部の規模は羨門幅90cm。奥行2.6m。玄室最大幅2.3m，同高さ1.35mで，いずれも主軸上で奥壁から47cmの位置にある。床面の傾斜は他の諸例に比較して，やや大きい。本横穴には内部設備は認められなかった。実測図では羨門の両側が外側に開くような形がみられるが，これは崩壊によるものである。

前庭部は一段低くなっていて，羨門床面との間に7cm前後の段をもつ。本横穴の前庭もM2号と同様，基本的には方形であるが，羨門正面の部分が，幅90cm，長さ60cm程度くい込んだような形を示している。前庭本来の幅は1.6mで，隅の切込みの形は直角に近い。また両側の残壁状の部分は，くい込んだような突出部の崖面付近で70cm前後であるが急激に高さを減じ，左側では約1m続いて消失する。前庭部は羨門から約1.3m付近まで存在したが，先端は崩落している。羨門両側の崖面には，前庭の面から上に85cm前後の位置に，前庭を設けたさいに生じた稜がある。

遺物は，玄室のほぼ中央，床面上6cmの位置で約30cm四方の範囲内に青銅製帯金具4個および小破片（第5図1～4，図版3－1）が出土した。

（5） M4号横穴（第3図－M4，図版2）

羨門の上端および左側が床面付近まで一部崩壊している以外は，原状を比較的よく残し，形も整ったものである。M2号およびM3号と同様，やや南に振れて西向きに開口する。

本横穴は羨道と玄室の区別が不明瞭な形式であるが，いわゆる尖頭アーチ形天井であること，低い棺座を有することおよび前庭部の形状等において，他とかなり異なっている。

玄室は大体左右対称形で，羨門から40cm入った付近まで幅がややせまく，羨道のなごりを止める。各部の規模は羨門幅93cm。奥行2.3m。玄室最大幅2.5m，同最大高（棺座上面から）1.57mである。

奥壁は全体がゆるやかに前傾し，頂部に玄室の最大高がある。天井の傾斜は断面実測図が示

すように，かなり強い。天井および壁面の仕上げは入念で，表面を美しく整えている。玄室内の設備としては低棺座とこれに伴う溝がある。棺座は奥壁から1.25mの規模をもち，玄室のなかば以上を占め，高さは5cmであるが明瞭に認められる。溝は棺座の両側壁面に沿ってあり，奥壁付近で湾曲して終るらしい。左側の溝は棺座前縁から50cm付近で不明瞭になる。棺座および玄室部分の床面はほぼ平で，羨門の部分が僅かに傾斜する程度である。

前庭は一段低くなっており，羨門部床面との間が高さ10cmの段をなし，崖面には前庭床面上80cm前後の位置に，前庭を設けたさい生じた稜がある。前庭は左側の一部が崩壊しているが，右側の形状からみると，M2号およびM3号との類似が認められる。すなわち，羨門から幅の狭い，短かい前庭が少し伸び，次いで幅が広がるのであるが，本横穴の場合には羨門に接する部分の規模が大きく，両側の崖面の一部をも掘込んだ広いもので，幅約2.3mに達している。羨門右側では崖面を斜めに切って90cm続き，次いで主軸と平行に折れ，約30cm伸びた位置で幅が70cm広がる。左側では羨門から50cmまでは羨門と一線をなし，次いで右側と大体同角度に広がっているが，55cm伸びたところで落盤のため，原状を失なっている。羨門と一線をなす左側の部分と，羨門右側の斜行する部分が相対するものであるか否かは明らかでないが，いずれにせよ前庭の規模はきわめて大きいと言える。

本横穴では前庭部の設備として，羨門の前に溝と封鎖設備の一部と考えられる台状の造り出し2個所の存在する点が注意される。台状の造り出しは，平面方形で，上面が小さく，四隅に稜があるが，左側のものでは磨滅のため，さほど明瞭でない。高さは左が約5cm，右が約8cmである。配置は対称でないが，2個1組をなすことは明らかであり，羨門の封鎖設備と考えてよいと思われる。これらと羨門の間には，深さ3～5cmの溝があるが，単なる排水溝ではなく，台状の造り出しと関係するものであるかも知れない。すなわち，羨門を封鎖するのに，岩塊の代りに板状の石材または厚板を溝に差込み，台状の造り出しで一部を支えて固定をつよめたと言う可能性も考慮する余地があるように思われる。

なお，本横穴でも前庭の先端は落盤のため崩壊しており，羨門前面付近で，羨門から1.5m前後で消失する。

遺物は前庭部覆土中から須恵器小破片1と土師器（坏）小破片1が，また前庭部末端の床面付近から須恵器（長頸瓶口縁部）破片1が出土したにすぎなかった。これらは，いずれも横穴内部が攪乱された時に，土砂と共に排出されたものと考えられる。また羨道相当部分の左壁から須恵器長頸瓶1個が出土した。

4. 遺　　物

遺物の数はきわめて少なく，Ｕ１号横穴から須恵器坏１，Ｍ３号横穴から須恵器長頸瓶１，帯金具破片４，およびＭ４号横穴前庭部から攪乱のさい排出されたと思われる須恵器破片２個と土師器破片１個が出土したにすぎない。

(1) 須恵器坏〈Ｕ１号横穴出土〉（第５図－５，図版３－３）

口縁の小部分を除き，ほとんど完全に近い状態に復原できた。縁が高く，坏と言うより浅鉢と言う方が適当な形で，県下では，まだ出土例のない種類である。

直径17.8㎝，高さ6.8㎝，底部直径11.2㎝。外面にろくろの痕跡を明瞭に残している。

(2) 須恵器長頸瓶〈Ｍ３号横穴出土〉（第５図－６，図版３－２）

口縁部を欠失している。現存部高さ22.2㎝，胴部最大幅15.5㎝，底部直径8.7㎝である。胴上半部が張出し，鈍い稜をもつ。底は高台になっている。頸部内外面に，ろくろの痕跡が著るしい。胴の一部には自然釉がみられる。

(3) 帯金具〈Ｍ３号横穴出土〉（第５図１～４，図版３－１）

尾錠１個（第５図－１）および方形の金具類３個（第５図２～４）で，いずれも鉄芯の上に青銅を貼ったものである。

尾錠は環状の金具に，鋲止めした２枚の楕円形の薄板が付いている。環状部分は縦3.1㎝，横1.8㎝，薄板の付いた軸は直形５㎜の円柱状をなし，一部に糸の付着がある。楕円形の薄板のうち，実測図で下側の方は，幅５㎜長さ約1.2㎝の帯状の足を巻きつけて軸に固定している。全体に腐蝕が激しく，細部の状態を明らかにできない。

方形の金具は４個出土した。完形に近いものは第５図－２の１例だけであるが，各部分の大きさから，いずれも，ほぼ同大と考えられる。片側に長方形の穴があり，片面だけ四辺の角と四隅を落している。反対側の面には細い鋲が突出する。器面の腐蝕が激しく，鋲の配置の確認ができないため，実測図では確実なものだけを記載したが，本来は四隅に付けられていたらしい。鋲は板に穿孔したのちに植えている。

(4) 須恵器および土師器破片〈Ｍ４号横穴前庭部出土〉

須恵器のうち１個は長頸瓶の口縁部から頸部にかけての破片で，器面の状態はＭ３号横穴出土の長頸瓶と酷似している。口縁のカーブから推定するとやや大型であるらしい，他の１片は器形不明である。土師器破片は坏の口縁部で，直径は推定13㎝前後と思われる。口が相当に開く器形で，縁に低い段があり形のかなり崩れた新しいものである。

5. 結　　び

今回発掘した5基の横穴は，すべて羨道と玄室の区別が失なわれ，平面が三角形を呈する形式で，末期横穴の範疇に入るものである。既に内部が攪乱されているため，年代を決定するための充分な資料が得られなかったが，U1号横穴出土の須恵器坏およびM3号横穴出土の，肩が張った高台付きの長頸瓶の特徴と，他の横穴群における横穴形式と副葬品の組合わせからみて，8世紀に入って作られたものと考えてよいであろう。

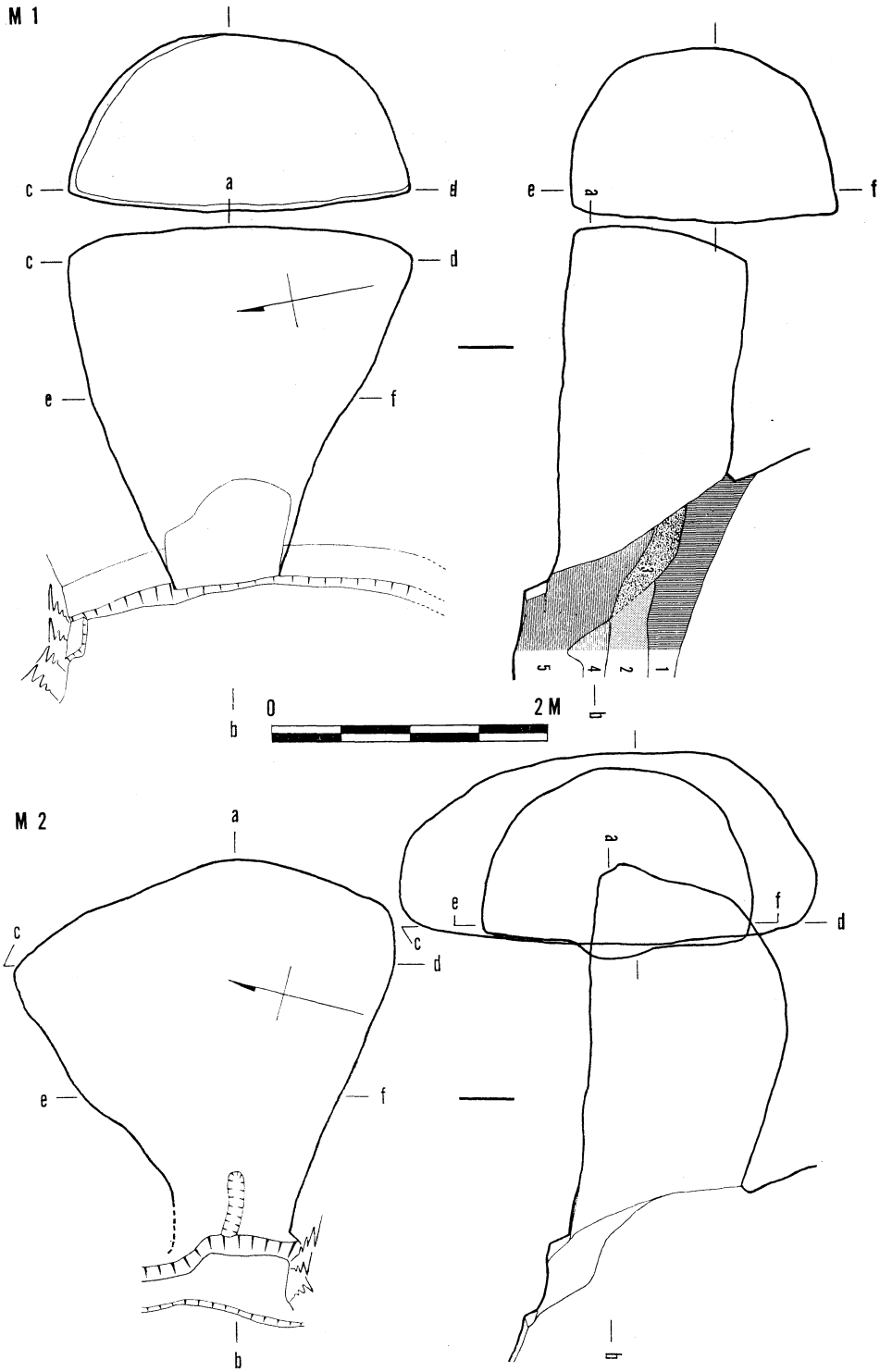
上，中，下3群および各群中の横穴の新旧については，にわかに断定できない。しかし，隣接して存在する中段の横穴4基に，形態の差が認められるので，一群にかなり年代の異なるものが存在することは明らかである。

今回の調査においては，横穴を設けるさい，山肌を削って作りだした崖面に横穴を掘込み，さらに前庭部を設けるため，崖面の下部を切り込んでいることを明らかにできた。このような横穴の構築手法は，県下では大磯町下田横穴群で報告された以外，まだ類例が知られていないが，今後その存在を注意する必要があると思われる。

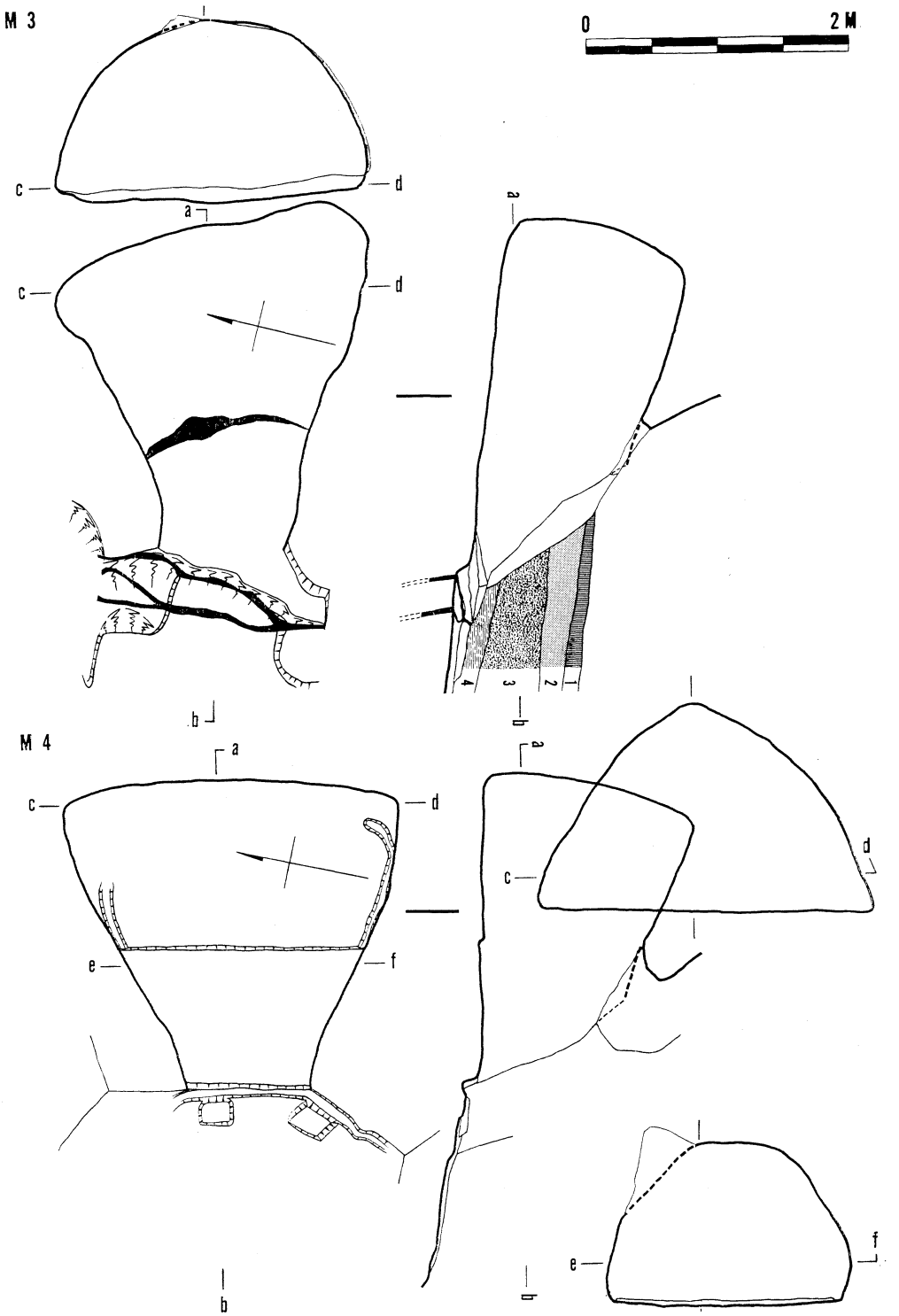
注

(1) 赤星直忠「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告　第1冊　大磯町教育委員会　1964（昭和39）年

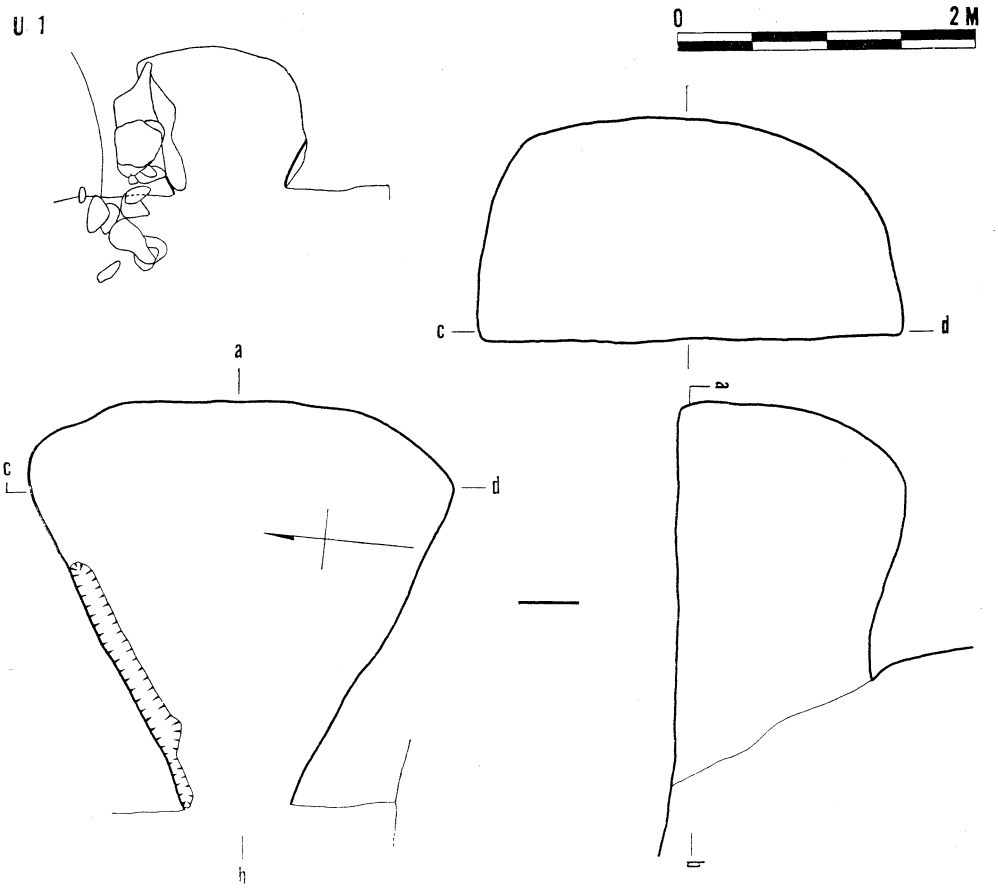
(2) 注1に同じ。



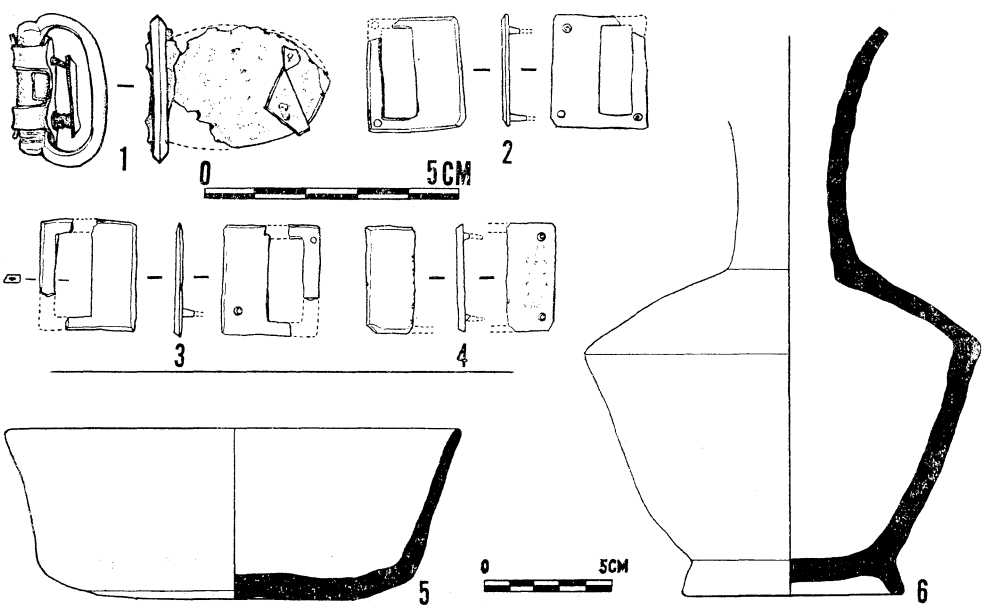
第２図 （上）Ｍ１号横穴実測図　　（下）Ｍ２号横穴実測図　（縮尺 50分の１）
層序　１＝表土　２＝暗褐色土層　３＝小岩塊を含む暗褐色土層
４＝大型の岩塊を含む暗褐色土層　５＝小岩塊層



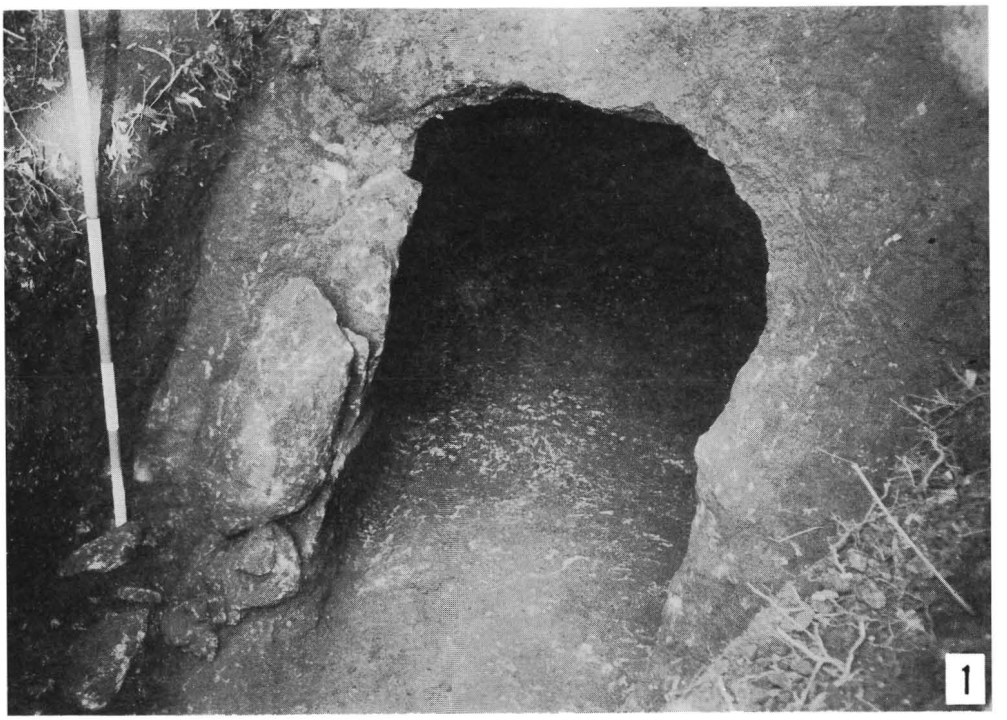
第３図 （上）Ｍ３号横穴実測図　　（下）Ｍ４号横穴実測図　（縮尺 50分の１）
層序　１＝表土　２＝暗褐色土層　３＝小岩塊を含む暗褐色土層
４＝大型の岩塊を含む暗褐色土層



第4図　U 1 号横穴実測図　（縮尺 50分の1）

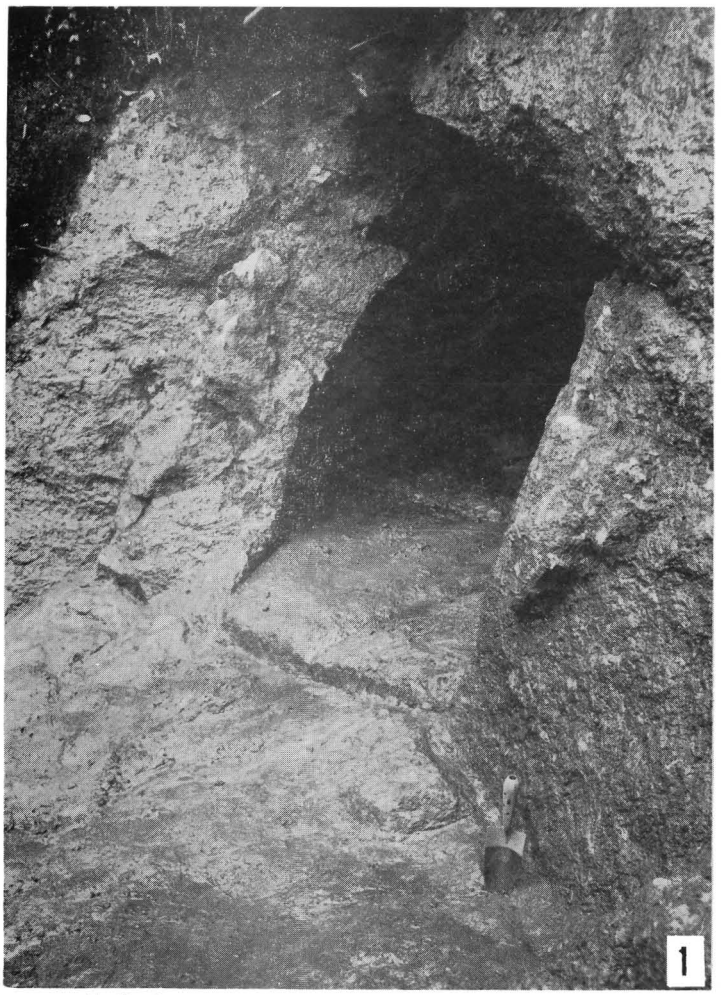


第5図　出土遺物実測図　1～4. 帯金具（M 3 号横穴）　5. 須恵器　坏（U 1 号横穴）
6. 須恵器長頸瓶（M 4 号横穴）

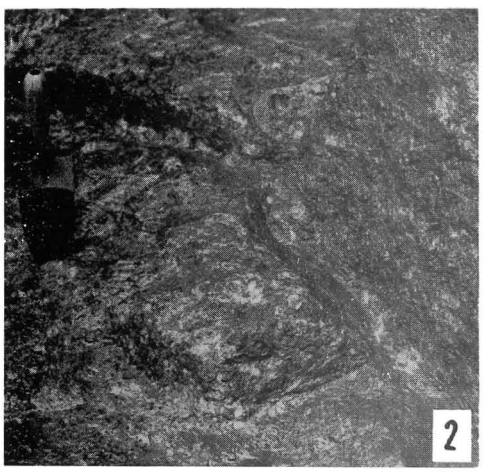


U 1 号 横 穴

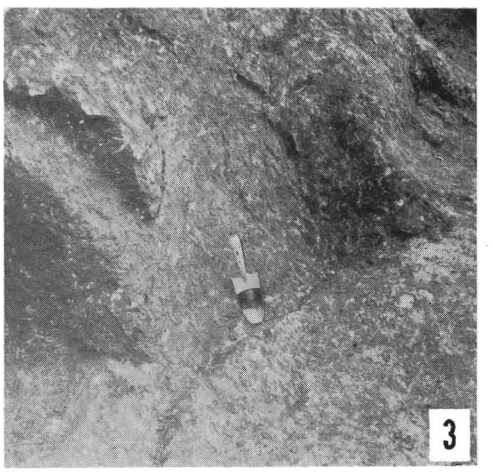
M 1 号 横 穴



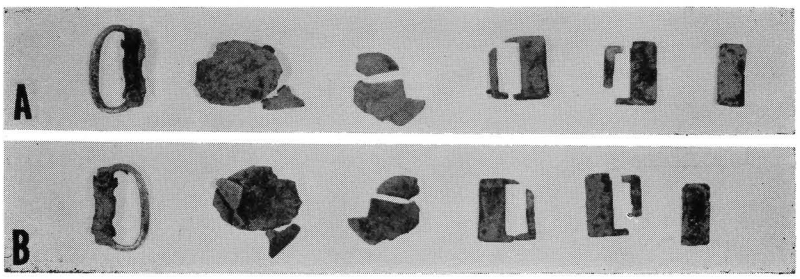
M 4 号 横 穴



M 4 号横穴前庭部（羨門付近）

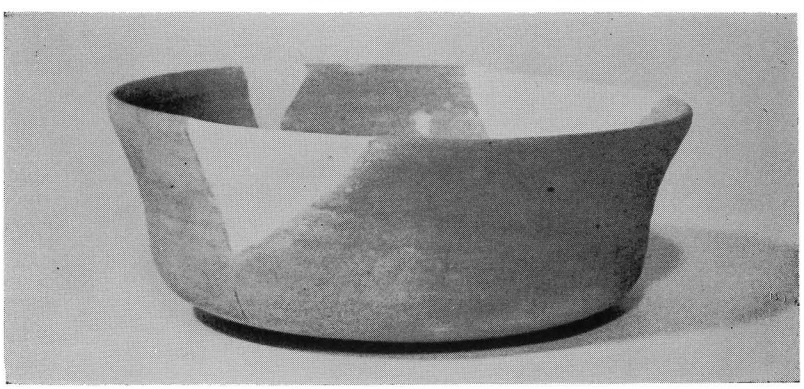


M 4 号横穴前庭部（切込み部分）



1

2



3

1. 帯金具 A＝表　B＝穴（M 3 号横穴）　2. 須恵器長頸瓶（M 4 号横穴）
3. 須恵器坏（U 1 号横穴）

昭和44年3月25日印刷
昭和44年3月31日発行

編集兼発行者
神奈川県立博物館
村田良策
横浜市中区南仲通5の60

印刷所（有）白秀堂印刷